

平成15年度第2回 全学FD アンケートのまとめ

回収：100名分（回収率：82.6%）
（参加者121名：総長等を除く）

質問1) 分科会では、教科領域のかかえる成績評価に関する問題点がどの程度取り上げられたとお考えですか。

- | | |
|-------------|-------------|
| 1) ほぼ全部 | 27名 (27.0%) |
| 2) ある程度 | 70名 (70.0%) |
| 3) なんとも言えない | 3名 (3.0%) |
| 4) まだ残っている | 0名 (0.0%) |
| 5) ごく一部 | 0名 (0.0%) |

質問2) ご参加なさった分科会のまとめ（全体会報告と質疑応答）に、加えたいとお考えの問題、あるいは、対応策がありましたら、お書きください。

問1で「1) ほぼ全部」の27名に係る問2内訳別での意見等

〔コア教養科目A〕

ほぼ全部の問題点が取り上げられた。 / 具体的には成績評価の実践例などを見聞する機会が必要である。

〔コア教養科目B〕

成績評価のもとになる学習の理解度の側面から、毎時間の授業のポイントのまとめを授業の最後にしっかり述べて、1回の授業をまとめると効果があるかと思いました。

〔言語文化科目A〕

シラバスの作成 / まとめの中にすべて言い表されている。

〔基礎科学科目A〕

到達度再調査の意義が全教官に理解されているかどうかを再検討すべき。点数の基準化をめざすより、再調査の方法の指針を示すべきではないだろうか。実施部会と担当者の中にカイリがあるのではないかと思う。もっと担当者（前年度担当者を含む）の間の情報交換のための会議を公式に持つ必要があると思う。共通シラバスの作成に受け手側の積極的に参加することが必要ではないか。 / 特になし。出るべき問題に関しては十分議論された。ただし、なぜこのような議論が必要なのか、それによって何が改善されるかについての認識があいまいであった。その意味では議論が収束しなかった。

〔基礎科学科目B〕

成績評価は教官の学問観、教育観が十分反映する自由度が必要。問題は極端な成績評価である。 / 科目を柱の形にして、学生が先生を選択できるようにする

問1で「2) ある程度」の70名に係る問2内訳別での意見等

〔コア教養科目A〕

成績認定の持つ意味の検討—eg. 毎学期成績認定が必要か。授業担当教官、問題作成教官、採点教官を別々にするような方法 etc. (→抜本的改革?) / コア教養科目に対する担当者の意識に、多少のバラツキがあるのが気になった。とくに、学部所属の方は、専門教育（専攻教育）との連動をいささか考えすぎではないかという気がする。 / 1. 「測度」の可否／難易度につ

いての取扱い eg. 文系と理系, 2. 尺度化の方法は統一できるか eg. レーティング精度／合否, 3. 評価基準は認定できるか eg. 教官のキャリアブレーションと評価, 4. 「ダメはダメ」として“NO”と言う力を「教官＋学生」集いに養わねば。→その結果を待遇に反映（インセンティブ化）しなければ・・・。

[コア教養科目 B]

やはり根本、問題についての議論がないと論点が混乱するのではないだろうか / 九大全学教育における成績評価の現状を把握し、九大に適した評価システムを開発することも必要ではないか。そのためには高等教育総合開発研究センターにおいて成績評価に関する研究を積極的に進めるべきではないか。そしてその成果をもとに成績評価に関する教員サポート体制を確立できればと考える。 / コア科目担当者が固定して、特定の者のみに毎年負担がかかる自体が解消されていない科目がある。 / 全学、専門教育に対するハード、ソフト両面からの支援充実。以前に比較して全学教育の内容、成績評価ともに改善されていると思う。この様な状況を九大として社会にもっと情報発信と説明が必要と感じられます。

[個別教養科目 A]

成績優秀学生への顕彰制度 / 結局、ほとんどの科目において、我々の分科会と同様、統一的な評価基準の導入はナンセンスという結論に達していたのが非常に印象的であった。適正（公正というべき？）な成績評価とは、結局、各教官が個々の評価基準をできる限り明示すること（シラバスの利用、授業中にも説明）で、学生に判断させるしかないのではないか。むしろ、授業教授法の改善を含む、よい授業を行うよう教官が心がける事が重要であり、成績はその後の問題と考えるべきであろう。評価をしつぱなしで終わるのではなく、評価後に学生に対してフィードバックできるような対応を考えることも真の学習意欲向上、学生の質の向上につながる事として重要と考える。個別に比してコアはある程度の統一性をもたせるべき、またそれが可能と思う。 / 海外の大学では、入学するのは易しいが卒業するのは難しい、と一般に言われていますが、“本気”で「適正な」成績評価をしようと思ったら、相当数の不合格者、並びに退学者が出ることを覚悟しなければならない様に思う。果たして、大学側にそこまでの覚悟があるのでしょうか？ 学生による授業評価など、大学や教師が見えない何かにおびえている状態で、学問や教育的情熱に基づく「正義」を行使しても良い、という保証を大学や社会が与えてくれれば、この様な問題は一挙に解消してくると思うのですが。

[個別教養科目 B]

成績評価の問題とともに、各教科間の関係、位置付けを再度話し合う必要があることが明らかにされたものと言えよう。

[言語文化科目 A]

統一テスト（および統一テストを前提とした統一教科書）の導入は評価の共通化という点では有効である。しかしそれにより学生も教官も統一テストのみを意識した学習・教育に傾いてしまうと考えられる。全学教育の場合、個別分野の知識・能力の習得と同時に、将来の広い可能性への意識を持たせることも意味があるのではないか。 / 成績評価と評価後の指導について（評価後のフォローアップをどうするか？） / 外国語により抱える問題が異なるのでそれぞれの学習の目的、到達度を少なくとも英語と未修外国語に分けて検討するべきだ。 / シラバスの充実

[言語文化科目 B]

言文Bで書かれていながら、報告されなかった点について強調しておきたい。成績のバラツキは、それ自体がマイナスの現象であるかのように論じられているかの印象を受けたが、そうではなく、ごく当然の現象である。 / 前もって議論がなかったため、あまり深い議論ができなかった。

[健康・スポーツ科学科目]

全体会では、共通に議論できるまとめ方が良いかもしれない。例えば、各分科会から「適正な成績評価をこのように考えた（今回のテーマにしたがって）」を提案してもらったらもっと良かった。このような方向がみられた分科会もありました。 / 実験・実習等は、そこに参加して知識を身につけたり、体験したりすることが重要であろう。これらに対して相対評価を導入することには無理がある。したがって絶対評価にならざるを得ない。将来的には合否だけの判定でも良いかもしれない。 / ゆるやかな相対評価の可能性 / 全学教育で指導すべき内容（特に身体知）の再検討—身体知の評価方法 / 共通テストの可能性・・・同一学科内での最低限の目標の確認法か？ テスト内容すべてである必要はないが。レポートの評価と返却・・・評価基準が不明確→学生に返却しうるか？

[基礎科学科目 A]

基礎科学に対する共通試験は無理という報告に賛成である。基礎科学を学ぶ意味を考えていかなければならない。将来の学生の立場に合った科学の学習内容（精選が必要）と視点が大切であると思う。 / 各出席者の工夫を知ることができて、おもしろい面もあった。各出席者が話す前提（科目、学生のちがい、学部からの要求 etc.）に対する理解がどうやら容易でなかったということが分かった（まとめや報告を聞いた後に）。つまりかなりデリケートであると感じた。したがって関係者の大まかな合意を正確にすすめたうえで、できるかぎりの工夫をつづけるのがよいかと思った。 / 基礎科学を専攻の初段階とする学科と、単なる教養と考える学科とは、クラスもシラバスも全く別にするべきだろう。“全学”にする意味がない。現に物理学科の学生が、物理の授業を1年から多くやってほしいとの希望をもっている。 / A 4 1枚にはまとめきれない / 多人数クラスの授業全てにTA（あるいはTA的仕事をする方）を配置してもらいたい。出席等調査は教員一人ではムリ！ 90分授業で出席 etc.に15分も使えない。幅広い視点から成績評価するには補助者が必要不可欠！！ / いきなり全学FDではなく、各科目毎に一定の議論をした後に、全学FDを実施すべきであろう。

[基礎科学科目 B]

同一学部を対象とした生物系の同一科目、特に「細胞生物学」については、担当教官間で学期前に text, シラバス（詳細）、成績評価法など打合せが必要であろう。 / 公平さ：評価が直接進路に影響する学部、学科—担当教官同士の基準のすり合わせ（事前に行う）。学生に習得すべき事項を明らかにして、評価基準を知らせておく。小テスト、レポート、出席点など多様な評価法を用いる。学生に勉強させる動機づけとして要望学科と習得すべき内容、化学の必要性、評価基準を相談しシラバスに記載する。教官の自由度と画一化とのバランス / 個々の講義の個性をなくすような方向は？進学査定に関わる問題（農・工）は全学教育の公平性とは別に議論すべき問題と考える。各授業科目の担当者で講義内容、テキスト、テスト等について打合せをするのは有用。各講義の点数分布が科目内で同じにする必要はないのでは？ / 大学の成績について同一科目（名）でありながら担当教員によるバラツキがある問題については、共通テキスト、共通試験で対応して改善することも考えられるが、現実的（一斉試験、クラスごとのちがい etc.）にむずかしいと思う。いわゆるアカウントビリティを示すこととして考える場合、成績表（？）に講義担当教員名を入れることも一案としてあると思う。これは基礎科学科目についての理解、それに対する要求が九大内で一致していない現状での一案です。 / 非常に短い時間で、議論をしながら報告書を作成しなければならないという制限のため、必ずしも議論の様子を正確に反映していない。FDのやり方自体に問題がある。分科会では容易にAを与える教官に対する問題点が指摘されたが、報告では不十分であったと思う。 / 適正な成績評価に関するソフト面での改良ばかりが議論され、ハード面（人的配置を含めた）の改善に関する議論が全くなされていない様に感じた。教官による評価の違いがある以上、現在のシステムは

本課題にとって大きな問題があると思われる。この点を出来るだけなくする方策としての組織再編成も視野に入れるべきなのではないかと感じる。 / 学生を授業にひきつける工夫 / 不合格率が極端に高い例はなくすべきで、その1方法として、せめて、不合格者の割合の目安位は必要でないか。合格者の評点については、しぼりはらない。

[情報処理科目]

ここで検討されたことを、どのようなルートで改善に反映させるかの道筋が明確に書かれていない。分科会内で議論は行った。分科会内では、大学科内での評価基準の差異をなくすため、担当者間での協議が必要と結論づけたが、具体的なプロセスまで結論付けられなかった。今後、検討を要する。

問1で「3) なんとも言えない」の3名に係る問2内識別での意見等

[言語文化科目A]

午前の「問題提起」で示された各科目における成績分布の状況を、言語文化科目（未修外国語）についても示していただき、各言語間に極端な偏りがあるようなら、しかるべき是正を行いたい。各教官が自分のデータにアクセスできるようにするだけでも、それなりの効果が期待できると思う

質問3) 全体会で報告のあった、他の分科会のまとめは、参考になりましたか？

6) とても	20名 (20.0%)
2) いくらか	61名 (61.0%)
3) なんとも言えない	11名 (11.0%)
4) あまり	2名 (2.0%)
5) 関係がなかった	1名 (1.0%)
6) 無回答	5名 (5.0%)

質問4) 成績評価に関するFDにおいては、どのようなプログラムが、そして、今回の成果を展開させるために、どのような検討方法が、有意義だとお考えですか。

問3で「6) ほぼ全部」の20名に係る問4内識別での意見等

[コア教養科目A]

成績評価と講義の内容との関係についてのFDに意義がある。

[個別教養科目A]

コア、個別 etc. それぞれについてより十分な時間をとって議論すべき。今回の形式はかなり無理があると思われる。

[個別教養科目B]

講義担当者が変わって、当初の主旨が分からなくなって（風化して）来ているので、徹底を計る必要を感じた。 / FDを行う以前にその内容について各領域ごとに話し合いを行い、FDそのものの話し合いの深化を促す。実際には全体会では充分話し合いができなかったことがある。

[言語文化科目A]

分野を超えて、分科会ごとに他の分科会へ改善の「助言」を与える（決して批判ではなくて）。

[言語文化科目B]

学生の学部や専門の違いを共通教育の内容に反映させるべきかどうかについて / 1. 担当の全教官に学生に対し《学習項目とその到達目標の公開》を義務づける→シラバスの標準化ということになるか？ 2. 学生に対して、成績評価基準を（学習項目と到達目標との関連で）公開することを義務づける。 3. その上で、成績にバラつきがでたとしても、成績評価の相対化は考えるべきではない。 4. 外国語のような科目では、語科別に非常勤講師も入れた評価に関する統一をすべき。以上のような問題にしぼってFDを行うべきである。

[基礎科学科目 B]

成績評価の「不公平」に起因する具体的な不具合（コース配属、進級等）に関するより詳しいデータ解析が必要？ 学部、学科間のルール？ 相違点がよく分からない。 / 成績によって進路がふり分けられる学部（農学部、工学部、文学部）などについて、同一科目で教官によって大きく異なる場合の成績評価について“公平化”するための、これまで具体的な方策は検討されていなかったと思われる。まずは、この点について、さらに踏み込んだアイデアが期待される

[情報科学科目]

各科目分野の分け方は実施システムの運用であって、固定されるものではない。学生諸君が勉強していく過程で、様々な分野の寄与は次第に変わってくるのである。科目分野の連続性を考えれば、成績評価について統一的な考え方が見え始めると思う。

問3で「7) いくらか」の61名に係る問4内訳別での意見等

[コア教養科目 A]

各科目担当者間での議論の場を組織的に用意される必要がある。 / 科目の位置付けをより明確にする必要がある。コア教養、基礎科学科目の目的について検討が必要。コア教養：かつての教養科目の役割は果たしていない。基礎科目：専攻教育への準備か教養か。目的が明確にならないと、基準をどのように作るべきかがはっきりしない。 / 成績評価は、運営方法や授業形態と切り離して考えることのできない問題だと思うので、全体を考えるような企画が必要ではないかと思います。 / 今回紹介されたような学生からの反応に対して教官たちがどう考えているか、大学としてどう考えるかを予め学生に対して、一般的な仕方では伝えることの意味と方法についての検討（場合によっては学生の不満に根拠がないことの指摘も含めて）。全学教育の成績評価と進学査定を独立させる可能性の検討（卒業要件ええは 進学要件には →全学教育は専門教育の前段階ではない）

[コア教養科目 B]

点数の平均化するような調整システム。もう少し理念を議論した方がよい / FDと企画・実施委員会との組織的連携が希薄である。もう1人外部からの専門家からの問題提起があってもよかったのではないか。

[個別教養科目 A]

ない（考えることは） / 科目の性質による違いをもう少し共通認識としてから議論すべきであると考え。また、評価方法に内在する問題とその個別的運用に関わる問題点とは区別して議論すべき。 / Free Discussionではなく Faculty Development になるには？ / 教官にももう少し時間を下さい（授業をするため準備時間（余裕）を下さい）。それにフレッシ考えが浮かぶと考えられます。 / 授業評価アンケートの結果等、自身の授業に対する評価を常に教えてくれる（とくにFD会議参加前には）ようシステムを確立してほしい。参加形態に問題はあがるが、学生（代表）の生の声も聞いた上でともに議論したい気がする。

[個別教養科目 B]

適正な成績評価の具体的な方法があるのかどうか。あるとすればどのようなものか。そうした

方法を実施する目的、得られる成果や影響、効果、あるいは実際的な活用法の検討が必要と思いました。 / 特に意見のある学生を呼んで意見を聴取するとか・・・誤解がとける面もあろう。授業の割り振りについては建設的な意見が出たのではないか（清水 展教授）（三隅助教 授資料）→ひとつの仮説として。2単位であることとの関係で成績評価を画一の方に近付けるか、それとも4単位のものも設けるかという一つの選択肢はあるようにも思われた。もっとも、必ずしも二者択一的に考える必要はないのかもしれないが・・・（現状維持的?!）グラフか数字資料だけでは事情を完全には把握できないことが示されたのではないか。 / 多様な学生を入学させた後、多様な教育を行っていて、そこに統一評価基準を求める事には困難さがあると思う。それでも比較的、基礎科学科目についてはやりやすいかも知れない。ただ統一的評価を行う事が大学としての教育として良いかどうかには疑問が残る。

[言語文化科目 A]

全学共通教育と個別教育との協力のあり方又は役割分担のあり方について。個別学部、大学院教育における成績評価のあり方についても同様に検討する必要があるのではないか。 / 有意義なプログラム：「問題提起」や「分科会」 / グループ分けについて。「言語文化科目」のグループは、その担当教官だけで構成するのではなく、他の科目の人を入れることで客観性が出ないか? / 教育目標（理念）あるいは教授方法と成績評価法の関連。（例えば結果としてA評価が多いとしても、1回のみ試験結果なのか、それとも小試験や再調査を重ねて到達度を上げた上での結果なのかでは、教育上の意味は大きく異なる。結果だけでは何とも判断しかねる場合が多かろう。） / 評価基準を公開し、学生が評価を納得し、その後の学習に反映できる工夫を行う。 / 英語の場合非常勤講師のFDが必要かもしれません / 各科目ごとの分科会を行う際、中に数名、他科目担当教官に加わってもらうのも有効と思われる。また、義務教育における成績評価の方法論等を講演してもらうのも参考になるとと思われる。

[言語文化科目 B]

今日のFDだけでは検討時間が足りなかったもので、今後は各科目ごとのFDを行って、改善を計っていくことが望まれると思われます。 / 分科会毎の今後の取り組みとその結果を一定時間経過後に紹介し合う / 今回の成果を文書化あるいは電子メディア化して、出席できなかった他の方々も読めるような形にすることが望ましいと思われます。

[健康・スポーツ科学科目]

現在の成績評価に対する学生の反応を調査し提示する。成績評価が厳しいが、学生の反応が良い教員の事例報告（評価、評価基準、授業内容（授業展開）などから分析した結果報告） / 各人のシラバスに評価の基準を記載することを義務づける。報告された成績の分布等は今後も続けて欲しい（今回だけに終わらずに）

[基礎科学科目 A]

問題点を考えさせられたという点において有意義であったと思う。事前レポートは役に立ったと思う。しかし、どうあるべきかという方向性などが見えにくいので各自の経験に基づく意見交換に終わってしまった感がある。又、全学教育科目についてあまりよく知らない学部の先生方にはあらかじめ全学教育についての情報を与えておくべきだったのではないかと思う。個別の問題から教養教育の意義まで含んでいたのが少々わかりにくかった。今後は、もう少しテーマ（科目）をしぼった方がよいのではないかと思う。 / “授業内容を良くするには”クラスの人数を100名以上を越えないようにし個々の教官が授業の準備に十分な時間をさけるようにすることである。 / 専門の組織（教育学部を含む）で熟成させてほしい。クラスの「リーダー」の有無が成績全体に反映すると思われる。よいリーダーやよいグループをクラス内に形成するためにはどうすればよいか。教員が学生に対し負っている責任を自覚したい。 / 試行した結果、成功例などを話すのもよいと思われる / 問題の設定が不明瞭 何が問題なのか

具体的に提示されておらず議論が空回りしやすい。問題は学生の不公平感なのか？どの程度のバラツキが問題なのか？教官側の見方に偏る傾向がある。学生も交えた議論の必要性を感じる / 客観性の高い生データの提示 / 基礎科目担当者が、各学部学科から教授項目、科目の位置付け（一般、専門、基礎）の情報が得られるようなシステムが必要ではないか。（旧）専門部の先生方に基礎教育の重要性、現場の状態に関心を持ってもらうFD etc.が必要。 / 学部関係者が全学共通教育をどのように捉え、どのように位置づけ、どの様にコミットしようとしているのかを明確にすることが必要。例えば各基礎科学科目の内容や到達度に対し、学部の明確な見解を開示することが重要だと思われる。

〔基礎科学科目 B〕

成績評価は教官の当科目についての学問観が反映する。従って、極端な成績評価を出す教官は「確信犯」である場合が多いと思う。対応としては一般論ではなく、個別に対応するシステムが必要と考える。 / 情報の公開が必要。今回初めて他の教官の成績評価結果を知った。学生の要望と学校側の提供できるものに。すりあわせのため、学生の授業選択範囲を増やす方向性が必要ではないか！化学科目については、まず基礎化学結合論と基礎化学熱力学が全学教育としての教養科目として真に適切かを検討する必要がある。もし適切であるとすれば共通シラバスや教授法、評価法の担当者間のすりあわせは勿論のこと共通テキストを作成すべきであろう。その際、共通基礎的な章とそれに続く各専門領域に関係する章を用意し、適時選択して講義できるようにしては ⇒公平化、標準化のためのプログラム / 今回の結果をどのように処理・提示するのか？ / 基礎科学科目についての認識を一致させること（専門のためか、理系共通の基本か）が行われないと、同一科目での公平、基準のはっきりした評価はむずかしいと思う。「理系共通の基本」で一致するなら、科目ごとの合格基準をまず討議する必要がある。

〔情報科学科目〕

検討項目がどのように実施され、その結果どうなったのかを明確に。FDに参加しなかった人に、どのように本会の検討項目が知らされたかを明確にする。とにかく、やりっぱなしにしない。 / 分科会による検討はたいへん有効であると思います。本FDで明らかになった問題点や各科目の認識の違いなどは全学で公開し、また機会をもうけて討論していただければと思います。 / （後半の全体会議のように）あまり時間を小刻みにして登壇者が入れ替わる方式は、あまり実効がないような気がする。特に「質疑対応者」の存在が不明瞭。実際、座長や報告者が質疑に対応していることが多い（それで良いと思う）。

問3で「8）なんとも言えない」の11名に係る問4内訳別での意見等

〔コア教養科目 B〕

各大学における成績評価に関する問題を改善するための取り組み事例の紹介。上記は大学組織での取り組みについてですが教員レベルにおいて適正な成績評価を実施されている方あるいは研究されている教員の方を招き事例や方法を紹介して頂く。適正な成績評価に関して多くの教員が問題意識を持っていないので部局レベルでのFDにおいてセミナー等を開催し啓発を行う。 / 全学で何をするか（何を目的として、何を行うか）の検討が必要

〔個別教養科目 A〕

各部会で同等の意見が提出された様ですが、質疑応答は各部会ごとだったので、それぞれの違いが分かりづらかった。最後の全体会は座長のみが前に出て、部会相互で主張を確認しあった方が良いと思う。もし、教師の恣意性を排し、より「適性？」な成績評価を目指すなら、「単独の講師による授業」という形をやめて、複数人による講義と評価、あるいは1つの授業に対して複数人のオブザーバーを立てて、成績評価についても監査する、という形式をとれば面白いとは思いますが（ただし教師の負担が圧倒的に増大して、授業のレベルが低下するのは必至だ

が)。

[健康・スポーツ科学科目]

学生の成績評価に関するアンケート結果に基づくFD / 全学教育とはそもそも何かについて共通認識を持てるような研修プログラムを期待します(それによって成績評価のあり方も変わるため)

[基礎科学科目B]

配属の割り振りの際の、成績の利用の仕方について再検討すべきだと思う。 / 世間の流れとして「公正な評価」を取り上げるのではなく、学生にとって一番何が良いのかをいう立場での「評価のあり方」に関する議論が必要と思われる。また、複雑になったカリキュラム自体に関するFDは必要ないのか。 / 資料が数年溜るまで、今の形のFDは休んだ(やめた)方がよいと思う。毎年やる必要はないと思う。

問3で「9)あまり」の2名に係る問4内識別での意見等

なし

問3で「10)関係がなかった」の1名に係る問4内識別での意見等

[言語文化科目A]

シラバス

問3で「11)無回答」の1名に係る問4内識別での意見等

[コア教養科目A]

望ましい実践例の紹介、講話などの企画があってもよいのでは。 / 「入学成績-就学態度-卒業成績-社会人行動」の個々の流れによる longitudinal standard を作る。→しかし、これは難しい。しかし、考慮を要する。測度不能の「文系」は評価対象として、認知領域ではなく、例えば情意、技能を採用する。

[健康・スポーツ科学科目]

何をもって適正とするのが前提にあるべき? それに対し、各学科がどう対応するか検討される

[基礎科学科目B]

成績評価基準の具体案(たたき台)を出して検討するのが効率的と思う

その他

[コア教養科目A]

淵田氏の話がとても参考になりました。 / 自ら、「スクール」の教員であるという自覚を継続するために「FD」は残す。

[個別教養科目A]

個別教養科目担当者として強い要望があります。現状では受講者が他学部にあたっている。それ自体に異存はないが、その結果として、講義をする内容を将来専門的に学習することを予定している学部の学生(例えば法学入門的な科目で、法学部生)とそうでない学部の学生が受講者に混在する状況にある。しかし、そうすると、講義をする側として、受講生のターゲットがしぼれなくなる。それに伴い講義内容の焦点もしぼりにくくなる。従って、法学部の教官がもつ科目には、法学部生は全く入れない、等の措置をとってほしいと考える。

[個別教養科目B]

情報交換の場そのものに意味があった。評価についての各教員の考え、悩みなど、共通するも

のが多いと感じた。

[基礎科学科目A]

前提に対する理解を深める機会をもたずに、多大なエネルギーを使うようなFDは考えものである。 / FDは日頃接する機会のない教官が交流する重要な場と考えられる。したがって休憩時、食事時の装置設備の設定準備に工夫があってしかるべきである。具体的には 1) 休憩場所の指定と設備（コーヒーサーバー、テーブル、イス等の設置） ロビーの積極的利用 2) 食事場所の整備、食堂（簡易？）の準備（クジによる座席指定もよいか）（食事もよいことが望ましい、仕出し？）（弁当、ポットは間合せであって失礼である） 金はかかるがそれだけのことはある。総長裁量経費があるはずである。 / 学生の学力低下への対策が今後、問題になってくると考えられる。基礎学力については、評価も、講義内容も一定基準を設けて、学生の学力向上を目指せないか？